



Title	エンカウンターグループの効果研究と今後の課題 メタ分析による研究の統合に向けて
Author(s)	押江, 隆
Citation	関西大学心理臨床カウンセリンググループ紀要, 2: 81-90
Issue Date	2011-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/4884
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	

エンカウンターグループの効果研究と今後の課題

メタ分析による研究の統合に向けて

関西大学大学院心理学研究科 押江 隆

要約

我が国ではエンカウンターグループ（EG）の効果研究がこれまで数多くなされている。本研究ではこれまでの効果研究の結果をメタ分析により統合し、EGが参加者の自己実現と自尊感情に有意な効果を有していることを示した（自己実現 $r = .227, p < .001$ 、自尊感情 $r = .154, p < .001$ ）。EGの効果研究にメタ分析を適用する上で、各研究で使用されている尺度が極めて多様であること、研究者によって効果の解釈の仕方が異なることなどから、統計量の統合が困難であった。今後効果研究の知見を蓄積し、EGが一般的に何にどの程度の効果を有しているかを示すためには、あらゆるEGで共通に使用できる統合的な効果測定尺度を新たに作成する必要があることを論じた。また、統合的な尺度の作成にあたっては、各研究者に一定のグループ観を強制するようなものであってはならないこと、EGの効果研究においては質問紙調査やそのメタ分析の結果がすべてではなく、面接調査や事例研究を丁寧に行う必要があることなどを論じた。

キーワード：エンカウンターグループ、効果研究、メタ分析、自己実現、自尊感情

問題と目的

我が国ではエンカウンターグループ（EG）に関する研究がこれまで数多くなされている。野島（2000a）によれば、非構成型EGに関する主な研究領域は(1)プロセス研究、(2)効果研究、(3)ファシリテーター研究、(4)適用の4領域、構成型EGに関する主な研究領域は(1)プロセス研究、(2)効果研究、(3)エクササイズ研究、(4)適用の4領域である。このうち効果研究はどちらの形態のEGでも質問紙や面接調査、事例研究などにより盛んに行われている（野島、2000a）。そのうち質問紙を用いた効果研究は(1)個人内過

程やパーソナリティに関するもの（自尊感情や性格検査など）、(2)対人関係に関するもの（社会的スキルや共感性など）、(3)適応状態に関するもの（ストレス反応やストレスコーピング、学校への適応など）、(4)自己実現に関するもの（POI（Shostrom, 1964）やSEAS（村山ら、1984）、SEAS2000（坂中、2003）を用いたもの）、(5)EGに特化したもの（EG効果尺度（常田、1999；松浦、2000；松浦・坂原・清水、2005）やPCAグループの学級集団形成尺度（白井、2010）など、EGの効果測定を目的に開発された尺度）などを用いたもの）の5領域に分類できる。それぞれの研究例を表1に示す。

表1 EGの効果研究で用いられる尺度例と研究例

	尺度例	研究例
(1) 個人内過程 ・パーソナリティ	自尊感情尺度	大関(1996)、久能・野崎(2004)
	Y-G 性格検査	伊藤(1992)、齊藤・中谷(2001)
(2) 対人関係	社会的スキル尺度	金(2003)、曾山・本間(2004)
	共感性尺度	鎌田(2002)
	共感経験尺度改訂版	高田・坂田(1997)
(3) 適応状態	ストレス反応尺度	四杉・加藤(2003)
	対人ストレスコーピング尺度	原田(2006)
	学校生活満足尺度	四杉・加藤(2003)、小野寺・河村(2005)
(4) 自己実現	POI	末武(1984)、高松・村山(1984)
	SEAS	坂中(2000)、谷川・村山(1990)
	SEAS2000	坂中(2001)
(5) EG に特化	EG 効果尺度	常田(1999)、松浦(2000)、松浦・坂原・清水(2005)
	PCA グループ的学級集団形成尺度	白井(2010)

このように、EG の効果研究はこれまでさまざまな領域の尺度を用いた研究が数多くなされてきている。しかし野島(2000a)も指摘するように、これらの研究はあまり整理されていない。そのため、EG が参加者に対して何らかの効果を有することは個々の研究から示されているものの、総合的にみてEG がいったい何にどの程度効果を有しているかについては不明確なままである。また、個々の研究に含まれるサンプル数が極めて少ないため、参加者の分散の偏りが生じやすい。しかし、EG は少人数の参加者からなる集中的グループ体験であるため、単一の研究から多くのサンプル数を得ることは困難である。

これらの問題はメタ分析を用いることで解決できる。メタ分析とは過去の効果研究の統計量を量的に統合する手法である。効果研究では t や F などのさまざまな統計量が用いられるが、メタ分析はこれらを単一の統計量に結合し、効果サイズ(effect size)と有意水準を算出する方法である。EG の効果研究にメタ分析を適用することにより、EG が一般的に何にどの程度の効果を有しているかを明らかにすることができる。また、複数の研究を統合するため、結果として多くのサンプル数を得ることができる。

本研究ではEG の質問紙調査を用いた効果研究の結果をメタ分析により統合し、EG のもつ一般的な効果について検討する。さらに、その結果から示唆された、EG の効果研究における今後の課題について議論したい。

方法

文献収集

CiNii や MAGAGINEPLUS で「エンカウンター 効果」、「エンカウンター 測定」をキーワードに検索を行った。また坂中(2007)の文献リストからEG の効果研究に関する文献を抽出した。そのうち統計量が示されていないなど、メタ分析が適用できない研究を除外したところ、(1)個人内過程・パーソナリティ領域のうち自尊感情や自己肯定感を測定する33研究と(4)自己実現領域の9研究が本研究の分析対象となった。なお、有沢(2000)、久野・野崎(2004)、森(2002)、高松・村山(1984)は1論文に2研究を含むため、それぞれを別研究として扱った。

分析方法

メタ分析にはいくつかの方法があるが、本研究ではMullen(1989/2000)を参考に分析を

実施した。統計量の統合にあたっては、有意水準として Z と p を、効果サイズとして r を用いた。本研究ではEG実施前と実施後の得点の変化を効果として扱い、フォローアップ調査（EG実施後しばらくして行われる追跡調査）や統制群（EGに参加しない群）との得点の比較については扱わなかった。

次に、フェール・セーフ数を求めた。フェール・セーフ（fail-safe）数とはファイル引き出し問題（file drawer problem）に対応した指数である。ファイル引き出し問題とは有意な結果を示さなかった研究が公刊されづらい問題をいい、フェール・セーフ数とはメタ分析で得られた結論を覆すのに必要な、公刊されていないであろう有意でない研究の数をいう。Rosenthal（1984）の基準では、算出したフェール・セーフ数が $5k + 10$ （ k は研究数）を超えた場合、ファイル引き出し問題が却下できると判断する。

さらに、有意水準と効果サイズの拡散比較を行った。拡散比較とはメタ分析に用いた個々の研究の変動性を検討するものであり、拡散比較が有意であった場合、含まれている仮説検定の有意水準や効果サイズが有意に異質であり、異なる母集団から抽出されたものであることを示す。

結果

自己実現について

自己実現を測度に用いた研究のメタ分析の結果を表2に示した。この結果から、EGの自己実現に対する効果は有意であり（ $p < .001$ ）、その効果サイズ（ $r = .227$ ）は小（ $r = .10$ ）から中（ $r = .30$ ）程度のものであることが示された。フェール・セーフ数は66.5であり、Rosenthal（1984）の $5k + 10$ （ $= 55$ ）基準を超えているため、ファイル引き出し問題は却下できると判断した。また拡散比較の結果、有意水準・効果サイズともに有意な変動性はみられなかった（有意水準 $\chi^2(8) = 4.36$, n. s.、効果サイズ $\chi^2(8) = 3.30$, n. s.）。なお、鎌田（1999）と鎌田（2004）で実施されたグループは構成型と非構成型を統合し、パーソンセンタードアプローチ（PCA）の基本仮説を重視した「PCAグループ（村山、2006）」である。鎌田（1999）ではPCAグループという用語は用いられていないが、その流れを汲むものであるため、PCAグループとして分類した。

自尊感情について

自尊感情や自己肯定感を測度に用いた研究のメタ分析の結果を表3に示した。この結果から、

表2 自己実現に関する効果研究のメタ分析結果

研究	グループの分類	尺度	N	有意水準		効果サイズ
				Z	p	r
伊藤（1992）	非構成型	POI	23	0.747	0.227	0.164
福井（1978）	非構成型	POI	20	1.769	0.038	0.404
高松・村山（1984）	① 非構成型	POI	14	0.446	0.328	0.131
	② 非構成型	改訂版 POI	40	1.728	0.042	0.276
阿部・村山（1984）	非構成型	効果測定尺度	52	2.450	0.007	0.334
谷川・村山（1990）	非構成型	SEAS	32	1.964	0.025	0.350
坂中（2001）	非構成型	SEAS2000	110	1.756	0.040	0.168
伊藤（1997）	非構成型	POI	18	2.539	0.006	0.242
谷川・村山（1987）	非構成型	SEAS	61	0.896	0.185	0.117
統 合			370	4.760	0.000	0.227

表3 自尊感情に関する効果研究のメタ分析結果

研究	グループ の分類	尺度	N	有意水準		効果 サイズ
				Z	p	r
有沢(2000)	① 構成型	自己概念尺度	13	3.120	0.001	0.466
	② 構成型	自己概念尺度	16	4.233	0.000	0.651
宮本ら(2000)	構成型	自尊感情尺度	10	0.270	0.394	0.066
曾山・本間(2004)	構成型	自尊感情尺度	8	0.932	0.176	0.134
松浦・坂原・清水(2005)	構成型	EG 効果測定尺度 (自己についての有意味感)	23	1.175	0.120	0.255
曾山・本間・谷口(2001)	構成型	自尊感情尺度	6	0.000	0.500	0.015
石川(1994)	構成型	自尊感情尺度	37	4.225	0.000	0.263
金(2003)	構成型	肯定的自己概念尺度	23	1.009	0.156	0.220
金(2005)	構成型	肯定的自己概念尺度	24	0.970	0.166	0.207
久能・野崎(2004)	① 構成型	自尊感情尺度	21	2.470	0.007	0.063
	② 構成型	自尊感情尺度	22	2.250	0.012	0.139
伊藤(1992)	非構成型	POI (Sr. Self regard)	23	-0.639	0.261	-0.145
大友(2002)	構成型	自尊感情尺度	17	0.348	0.364	0.091
大友(2001)	構成型	自尊感情尺度	12	0.523	0.301	0.168
福井(1978)	非構成型	POI (Sr. Self regard)	20	2.015	0.022	0.454
福井・小柳(1980)	非構成型	POI (Sr. Self regard)	9	0.471	0.319	0.182
川崎(1994)	構成型	自己肯定度調査項目	10	1.778	0.038	0.580
高田・坂田(1997a)	構成型	自己肯定度インベントリー	15	3.111	0.001	0.318
森(2002)	① 構成型	自尊感情尺度	29	2.205	0.014	0.578
	② 構成型	自尊感情尺度	33	-1.317	0.094	-0.345
河村(2005)	構成型	自尊感情尺度	87	-0.285	0.388	-0.031
宮前・竹内(2005)	構成型	自己肯定意識尺度	39	0.298	0.383	0.049
野崎・早坂・久能(2003)	① 構成型	自尊感情尺度	23	1.772	0.038	0.151
	② 構成型	自尊感情尺度	7	1.096	0.137	0.086
高田・坂田(1997b)	構成型	自己肯定度インベントリー	17	1.320	0.093	0.098
高松・村山(1984)	非構成型	POI (Sr. Self regard)	14	0.288	0.387	0.084
谷川・村山(1990)	非構成型	SEAS (現在の自分の肯定)	32	1.768	0.039	0.317
坂中(2001)	非構成型	SEAS2000 (ありのままの自己肯定)	110	0.425	0.335	0.041
伊藤(1997)	非構成型	POI (Sr. Self regard)	18	1.441	0.075	0.144
鎌田(1999)	PCA	自己評価尺度	52	7.399	0.000	0.343
本山(1999)	非構成型	自己肯定感尺度	16	0.804	0.211	0.216
鎌田(2004)	PCA	自己評価尺度	38	1.573	0.058	0.259
谷川・村山(1987)	非構成型	SEAS (現在の自分の肯定)	61	-0.050	0.480	-0.007
統 合			885	8.181	0.000	0.154

EGの自尊感情に対する効果は有意であり ($p < .001$)、その効果サイズ ($r = .154$) は小 ($r = .10$) から中 ($r = .30$) 程度のものであることが示された。フェール・セーフ数は783.2であり、Rosenthal (1984) の $5k + 10$ ($= 175$) 基準を超えているため、ファイル引き出し問題は却下できると判断した。また拡散比較の結果、有意水準に有意な変動性が認められた ($\chi^2(32) = 88.12, p < .001$) が、効果サイズには有意な変動性はみられなかった ($\chi^2(32) = 37.57, n. s.$)。

考 察

メタ分析の結果から示唆されるEGの一般的効果

メタ分析の結果、EGが一般的に自己実現について小から中程度の有意な効果を有することが示された。自己実現を測定した効果研究はすべて非構成型EGによるものだった。非構成型EGはベーシックエンカウンターグループとも呼ばれ、PCAを理論的根拠としている。PCAでは「個人は自分自身のなかに、自分を理解し、自己概念や態度を変え、自己主導的な行動をひき起こすための巨大な資源をもっており、そしてある心理的に促進的な態度についての規定可能な風土が提供されさえすれば、これらの資源は働き始める (Rogers, 1986 / 2001)」と仮定され、促進的な風土が提供されれば人は「経験していることにますますオープンになり、ますます実存的に生き、自分の有機体をますます信頼する「十分に機能する人間」になるという方向に動いていく (Rogers, 1961 / 2001)」とされる。その性質を測定する尺度としてPOI (Shostrom, 1964) やその日本版であるSEAS (村山ら, 1984)、その改訂版のSEAS2000 (坂中, 2003) などの自己実現尺度が用いられている。SEAS2000 (坂中, 2003) は「ありのままの自己肯定」、「とらわれからの解放」、「自己信頼」、「率直さ」の4つの下位尺度を含むが、こ

れらは「十分に機能する人間 (Rogers, 1961 / 2001)」の特徴を測定する尺度としてみなすことができる。以上より、本研究はEGが一般的に参加者の自己実現を促進する効果を有していることを示し、その理論的根拠としてのPCAの仮説を実証するものとして捉えることができよう。

またメタ分析の結果、EGが一般的に自尊感情について小から中程度の有意な効果を有することが示された。EGでは自尊感情や自己肯定感が効果研究の測度とされることが多い。たとえば久能・野崎 (2004) はPTAの保護者に人間関係・自尊感情の向上となる場を提供することを目標にEGを実施し、それを検証している。鎌田 (2002) は入学初期の看護学生が仲間作りを中心に今後の学校生活への適応を援助していくことを目標にEGを実施し、自己像が肯定的に変化することなどを示している。Rogers (1970 / 1982) はEGの個人に及ぼす効果として自己概念の変化を挙げ、また國分 (2000) はEGの効果として自己認知の肯定的変化を示唆している。これまでのEGに関する研究が示唆してきた参加者の自尊感情に対する効果を、本研究は一般化して示すことができたといえるだろう。

なお、自尊感情については拡散比較において有意水準に有意な変動性がみられ、個々の研究が異なる母集団によるものである可能性が示唆された。これは、本研究で扱った自尊感情の効果研究が、韓国の小学生 (金, 2003) やPTAの保護者 (久能・野崎, 2004) などさまざまな参加者を対象としたものを含んでいるためと思われる。

EGの効果研究にメタ分析を適用する際の問題点

本研究を実施するにあたって80本を超える論文を収集したが、メタ分析に適用できる研究は自己実現 (表2) と自尊感情 (表3) をあわせてわずか30本であった。その理由として、統

表4 「EG 効果尺度」の下位尺度

常田(1999)	松浦(2000)	松浦・坂原・清水(2005)
自信・自己受容	自己存在感	内面の伝達
素直な自己表現	他者内面の理解	自己についてのの有意味感
対人不安	自己一致	人間関係についての自信
人との相互理解欲求	他者受容	自己についての自信
他者に対する気兼ね	自己信頼	自己の一貫性
		人間の受容性に対する信頼

計量を適切に示していないなど論文の記載上の問題が散見されたことも挙げられるが、EGの効果研究にメタ分析を適用する上で生じる問題によるところが大きい。以下その2点の問題について述べる。

第一に、リンゴとオレンジ問題 (Apples & Oranges Problem; Mullen, 1989 / 2000) が挙げられる。リンゴとオレンジはともに果物であり、同じ種類の植物としてみなせる一方、リンゴはバラ科、オレンジはミカン科であるから、異なる種類の植物としてみなすこともできる。このことと同様に、メタ分析で統計量を統合する上で、異なる尺度の結果を統合する際は、尺度の差異をどこまで許容するかが問題となってくる。表1にも示したように、EGの効果研究においては幅広い領域にわたる実にさまざまな尺度が用いられている。また、EGに特化した尺度として「EG効果尺度」が複数作成されている(常田, 1999; 松浦, 2000; 松浦・坂原・清水, 2005)ものの、各尺度はかなり異なる下位尺度を含んでいる(表4)。そのため、各尺度から得られた統計量の統合が難しい。

第二に、効果の解釈の問題が挙げられる。表3に示した自尊感情の効果研究では、自尊感情の得点が増加した場合を正の効果として、得点が増加した場合を負の効果として解釈していた。一方、野島(1977)は得点の変動を絶対値で測定し、上昇・下降ともに正の効果として解釈していた。野島(1977)はこのことを「両向性の変化促進」と呼び、「(EGは)ある人には上昇化、ある人には下降化を促進する」と結論づけ

ている。これは一例であるが、このように効果をどのように捉えるかは各研究の研究者によってまちまちであるため、各研究の統計量の統合が困難であった。

以上の問題は、EGの研究者によってグループ観やグループの目的が異なることを反映していると思われる。たとえば野島(2000b)はEGを「自己理解、他者理解、自己と他者との深く親密な関係の体験が目的」とし、小柳(1992)はEGを「充実した無為を楽しむ場」として位置づけている。中田(2005)は研修型EGの目的を「問題意識性の促進」としている。このように、研究者によってグループ観は実にさまざまであり、それに応じて尺度や効果の解釈の仕方が多種多様なものとなるのは当然の帰結であろう。PCAの哲学である「多様性の共存」、「個人の尊重」といった観点から、グループ観の多様性は尊重されるべきであり、むやみに統合されるべきではない(中田, 2005)ものの、今後効果研究の知見を蓄積する上では障壁の1つになると思われる。

EGの効果研究における今後の課題

それでは、EGの効果研究は今後どのように進めていく必要があるだろうか。以上の議論をふまえて筆者の見解を以下に述べる。

まず、どのEGでも共通して使用できる統合的な効果測定尺度を作成する必要がある。野島(2000a)は「効果測定尺度の決定版」の必要性を主張しているが、本研究のようにEGの効果研究の結果を統合し、EGが一般的に何に対し

てどの程度の効果を有しているかを検討する上でも必要と思われる。そのためには、これまでの効果研究を概観した上で、それらに共通する下位尺度を含んだ尺度を作成し、EGの効果研究ではなるべくその尺度を実施することで、同一の尺度による知見を蓄積することが必要である。同一の尺度を用いた効果研究であれば、メタ分析による統合は容易であるため、今後の尺度開発が望まれる。Cooper (2008) も示しているように、欧米では心理療法の効果研究をメタ分析により統合する研究が非常に活発になされている。しかし、EGについてはほとんど見当たらない。それどころか、EGの効果研究そのものがほとんどなされていないようである。EGの効果研究を統合する研究は、EGが活発な我が国においてこそ可能な研究であり、広く海外に向けた発信も含め、今後発展が望まれる研究領域といえるだろう。

ただし先にも述べたように、多様なグループ観は尊重されるべきであり、統合的な尺度が個々の研究者に特定のグループ観を強要するようなものであってはならない。ゆえに、統合的な尺度に加え、個々のグループ観に応じた調査も同時に実施されるべきであると筆者は考える。そのためには、各研究者が自らのグループ観やグループの実施目的を明確にした上で、それに対応した尺度を利用する必要があるだろう。グループ観を明確に表明したPCAグループ(村山、2006)の学級への効果測定に特化した「PCAグループ的学級集団形成尺度」の開発とそれを利用した効果研究(白井、2010)はその一例といえるだろう。

また、EGの効果研究は質問紙調査のみによるものであってはならない。質問紙調査による効果は研究者が定義するものであり、そこにはEGの参加者の感想や実感は含まれていない。自尊感情の上昇のみを効果として捉える立場と、上昇・下降ともに効果として捉える立場がありうることを先に述べたが、どちらの立場をとるかを決定するのは常に研究者であって、参加者

の手には委ねられていない。研究者が効果として想定していることが、参加者にとっては効果ではないかもしれない。実際に、Rosenberg (1965)の自尊感情尺度において、「私はすべての点で自分に満足している」という項目に「あてはまらない」と回答した者がその理由として「まだまだこれから向上したいから今の時点では満足できない」ことを挙げるなど、研究者の想定と回答者の回答理由が必ずしも一致しないという田中(1999)の指摘もある。

質問紙調査はその性質上、研究者が効果を定義するものであって、研究者はその限界を常に自覚しておく必要がある。またRogers(1977/2001)は「(PCAの観点では)評価、決定の主体は、明らかにクライアントの手中にある」と述べており、効果を研究者のみが評価、決定することはPCAの発想と矛盾する危険性を常に孕んでいる。したがって、質問紙調査やそのメタ分析の結果のみが独り歩きするようなことがあってはならない。EGの効果研究は質問紙調査だけでなく面接調査、事例研究などによっても行われている(野島、2000a)が、面接調査や事例研究などから得られる参加者の実感や感想を丁寧に検討するこれらの研究法は今後も積極的に行われるべきだといえるだろう。

文 献

- 阿部啓子・村山正治(1984):エンカウンター・グループの効果測定尺度作成の試み 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 29(2), 85-92.
- 有沢孝治(2000):参画型グループ・エンカウンターの重層的参加体験にみる自己変容の効果 東海大学紀要, 8, 45-73.
- Cooper M (2008): *Essential research findings in counselling and psychotherapy: the facts are friendly*. Los Angeles: SAGE.
- 福井康之(1978):自己実現測度にみるエンカウンター・グループ経験の効果 愛媛大学教育学部紀要第1部教育科学, 24, 71-80.

- 福井康之・小柳晴生(1980):エンカウンター・グループ経験の効果の測定について 相談学研究, 13(1), 1-8.
- 石川みち子(1994):看護教育におけるグループ・エンカウターの応用とその効果に関する研究(その2) 千葉県立衛生短期大学紀要, 12(2), 71-86.
- 伊藤義美(1992):短期集中型エンカウンター・グループの効果研究 名古屋大学教養部紀要, 36, 51-66.
- 伊藤義美(1997):学生のベーシック・エンカウンター・グループの影響に関する実証的研究 名古屋大学情報文化学部情報文化研究, 5, 131-144.
- 金奎卓(2003):韓国の小学校における短期集中型構成的エンカウンター・グループの試み—グループ構成、プロセス、効果について 人間性心理学研究, 21(2), 176-186.
- 金奎卓(2005):日本の小学校における短期集中型構成的エンカウンター・グループの実践研究—グループ構成、プロセス、効果の検討 九州大学心理学研究, 6, 49-56.
- 河村壮一郎(2005):大学生の友人関係に対するエンカウンター・グループを取り入れた授業の効果 鳥取短期大学研究紀要, 52, 13-20.
- 鎌田道彦(1999):必修授業で行われたエンカウンター・グループの効果測定とその考察 日本人間性心理学会第18回大会発表論文集, 70-71.
- 鎌田道彦(2004):現代の学生の心理的特徴に対するPCA Groupの有効性—看護学校卒業前のエンカウンター・グループにおける対人不安・共感の測定 東亜臨床心理学研究, 3(1), 9-17.
- 川崎知己(1994):構成的グループ・エンカウンターが中学生の進路意識に及ぼす効果 カウンセリング研究, 27(2), 132-144.
- 國分康孝(2000):育てるカウンセリングとしての構成的グループ・エンカウンター 國分康隆(編)続・構成的グループ・エンカウンター 誠信書房 pp3-13.
- 久能弘道・野崎徹(2004):PTA 短期研修型構成的グループ・エンカウンターが人間関係・自尊感情の向上に及ぼす効果 北海道教育大学紀要(教育科学編), 54(2), 51-71.
- 松浦光和・坂原明・清水幹夫(2005):ベーシック・エンカウンター・グループの効果測定する尺度の作成—3名のファシリテーターの経験に基づいて 仙台北百合女子大学紀要, 9, 39-52.
- 宮前理・竹内加奈子(2005):教育大学の学生における構成的グループ・エンカウターの効果 宮城教育大学紀要, 40, 245-250.
- 宮本博江・木下裕紀子・岩野有美・山本銀次(2000):イメージを媒介とするエクササイズにみるメンバー、リーダー、および集団の変容 東海大学紀要, 8, 97-117.
- 森美保子(2002):自己開示抵抗感のある学生に対する想定書簡法の効果—構成的グループ・エンカウンターと比較して カウンセリング研究, 35(1), 20-29.
- 本山智敬(1999):高校生を対象とした非構成的エンカウンター・グループの効果に関する研究 日本人間性心理学会第18回大会発表論文集, 90-91.
- Mullen B(1989):*Advanced Basic Meta-analysis*, Hillsdale, NJ: L. Erlbaum Associates. (小野寺孝義(訳)(2000):基礎から学ぶメタ分析 ナカニシヤ出版)
- 村山正治(2006):エンカウンターグループにおける「非構成・構成」を統合した「PCA -グループ」の展開—その仮説と理論の明確化のころみ 人間性心理学研究, 24(1), 1-9.
- 村山正治・山田裕章・峰松修・冷川昭子・亀石圭志(1984):自己実現尺度で測る精神的健康(3)—項目とフォームの決定 健康科学, 6, 45-57.
- 中田行重(2005):問題意識性を目標とするファシリテーション—研修型エンカウンター・グループの視点 関西大学出版部
- 野島一彦(2000a):日本におけるエンカウンター・グループの実践と研究の展開:1970-1999 九州

- 大学心理学研究, 1, 11-19.
- 野島一彦 (2000b) : エンカウンター・グループのファシリテーション ナカニシヤ出版
- 野崎徹・早坂秀則・久能弘道 (2003) : 教職員短期研修型構成的グループ・エンカウンターが人間関係・自尊感情の向上に及ぼす効果 北海道教育大学教育実践総合センター紀要, 4, 247-258.
- 大友秀人 (2001) : コミュニケーションの能力を高めるためのトレーニング方法とその効果に関する研究——構成的グループエンカウンターを用いて 青森明の星短期大学紀要, 27, 1-16.
- 大友秀人 (2002) : 構成的グループエンカウンターが短大生の自己開示の効果に関する研究 青森明の星短期大学紀要, 28, 35-46.
- 小柳晴生 (1992) : 私のエンカウンター・グループ観とグループに臨む姿勢 人間性心理学研究, 10(2), 79-83.
- Rogers CR (1961) : A Therapist's View of the Good Life: The Fully Functioning Person In *On becoming a person*. Boston: Houghton Mifflin. pp184-196. 伊東博 (訳) (2001) : 十分に機能する人間——よき生き方に関する私見 H.カーシェンバウム・V. L. ヘンダーソン (編) 伊東博・村山正治 (監訳) ロジャーズ選集——カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文 (下) 誠信書房 pp190-204.
- Rogers CR (1970) : *Carl Rogers on encounter groups*. New York: Harper & Row. 島瀬稔・島瀬直子 (訳) (1982) : エンカウンター・グループ——人間信頼の原点を求めて 創元社
- Rogers CR (1977) : The Politics of the Helping Professions In *Carl Rogers on personal power*. New York: Delacorte Press. pp3-28. 島瀬稔 (訳) (2001) : 援助専門職の政治学 H.カーシェンバウム・V. L. ヘンダーソン (編) 伊東博・村山正治 (監訳) ロジャーズ選集——カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文 (下) 誠信書房 pp150-173.
- Rogers CR (1986) : A Client-centered / Person-centered Approach to Therapy In Kutash I & Wolf A (Eds) *Psychotherapist's casebook*. San Francisco: Jossey-Bass. pp197-208. 中行重 (訳) (2001) : クライアント・センタード/パーソン・センタード・アプローチ H.カーシェンバウム・V. L. ヘンダーソン (編) 伊東博・村山正治 (監訳) ロジャーズ選集——カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文 (上) 誠信書房 pp162-185.
- Rosenberg M (1965) : *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Rosenthal R (1984) : *Meta-analytic procedures for social research*. Beverly Hills, CA: SAGE.
- 坂中正義 (2001) : SEAS2000 をもちいたエンカウンター・グループの効果研究 日本心理臨床学会第20回大会研究発表集, 243.
- 坂中正義 (2003) : 改訂版自己実現スケール (SEAS2000) 作成の試み 福岡教育大学紀要 (教職科編), 52, 181-188.
- Shostrom EL (1964) : An Inventory for the Measurement of Self-Actualization. *Educational and Psychological Measurement*, 24, 207-218.
- 白井祐浩 (2010) : PCA グループ的視点から見た学級集団形成尺度の作成 心理臨床学研究, 28(4), 523-528.
- 曾山和彦・本間恵美子・谷口清 (2001) : 不登校を背景要因に持つ生徒に対する構成的グループエンカウンターの効果——適応指導教室での事例を通して 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 303.
- 曾山和彦・本間恵美子 (2004) : 不登校傾向生徒に及ぼす構成的グループ・エンカウンターの効果——Self-esteem、社会的スキル、ストレス反応の視点から 秋田大学教育文化学部研究紀要, 59, 51-61.
- 高田ゆり子・坂田由美子 (1997a) : 保健婦学生の自己概念に構成的グループ・エンカウンターが及ぼす効果の研究 カウンセリング研究, 30(1), 1-10.
- 高田ゆり子・坂田由美子 (1997b) : 構成的グルー

- ブ・エンカウンターが養護教諭課程学生の自己概念に及ぼす効果の研究 学校保健研究, 39, 347-354.
- 高松里・村山正治(1984):エンカウンター・グループにおける体験内容と効果との関連について—「体験内容目録」の作成を通して 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 29(1), 55-65.
- 田中道弘(1999):Rosenbergの自尊心尺度に対する回答理由の研究 日本青年心理学会第7回大会発表論文集, 29-30.
- 谷川由美・村山正治(1987):エンカウンター・グループ体験認知スケールの作成とその適用 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 32, 227-236.
- 谷川由美・村山正治(1990):エンカウンター・グループにおける自己実現度の促進効果 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 35(2), 119-128.